

危機対応成功宣伝を展開する中国当局の背景

中国のコロナ感染症での危機管理成功宣伝への力の入れ方は異常だ。中国共産党への感謝まで教育される国民の心理たるやいかなるものか。初期対応で失敗したことを認識していればこそそのキャンペーンであることは誰の目にも明らか。

圧倒的な大陸の経済力を前に、一見、追いつめられているかに見える台湾だが、実はそうでもないのだ。実にしたたかに生きている。台湾人の圧倒的多数が、中国への統合を嫌い、事実上の独立状態の現状を支持しているのが最大の武器だ。

現行体制支持は盤石。中国共産党もそうした民意に対しては、如何ともしがたい。お手上げ状態。それだけでなく、台湾では民主制が機能しているということが大陸当局にとってボディブローにもなりかねない・・・との懸念は強まるばかり。

大陸では情報隠蔽が最大の原因となって初期対応が遅れ大打撃をこうむった。台湾は果敢な初期対応で見事な危機管理を見せつけた（武漢の新たな感染症の発生を受け、19年12月末と言う段階で、いち早く、大陸からの移動者への厳重チェックを実施。さらには大陸からの全移動を禁じた。マスクなどの不足に対しては、購入者の実名登録、転売者への刑事罰など）。

中国大陸当局にとってこの対比が、正直、最も恐ろしい。一党独裁下の強権的な体制での隠蔽体質では国民を守り切れないということなのだから。いくら服従と結束を教育されても、自分の命に係わるとなれば黙ってはいない。

筆者 大貫啓行